

母・有吉佐和子との日々



身がわり

有吉玉青

新潮社

身がわり

母・有吉佐和子との日々

吉玉青

新潮社

有吉玉青（ありよし・たまお）

1963年、東京に生れる。1986年、早稲田大学文学部哲
学科卒業後、東京大学文学部美学芸術学科へ学士入学。
現在、同大学院在学中。

装画：浜口陽三（銅版画「2つのさくらんぼ」〔部分〕1957）

	身 ^み がわり	母 ^{はは} ・有吉 ^{ありよし} 和子 ^{わこ} との日 ^{いちにち}
	一九八九年三月二〇日 発行	一九八九年五月一日 六刷
著者	有吉玉青 ^{ありよし・たまお}	
発行者	佐藤亮一	
発行所	株式会社新潮社	
東京都新宿区矢来町七一		
郵便番号	一六二	
電話（業務部）	03—二六六—五一—	
（編集部）	03—二六六—五四—	
振替	東京四—八〇八	
印刷	錦明印刷株式会社	
製本	加藤製本株式会社	
© Tamao Ariyoshi 1989. Printed in Japan		

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-372901-5 C0095

身がわり ■ 目次

プロローグ 7

I

りんごの子 11

おかあさんは小説家 17

教育ママ奮闘記 25

あてどもない反抗の頃 34

冬の軽井沢 48

II

ハイスクール・デイズ 57

自意識過剰娘の拍子ぬけ 64

凝ったもの、あれこれ 69

親は親、子は子 79

受験生の哀しき母親 88

新人生の愛すべき母親 102

期待はずれ 114

コンプレックス 119

Ⅲ

我、生きん 133

初盆 140

母子、イギリスへ 146

ケンブリッジ三十日 153

二十歳の喪主 168

祖母のこと 186

曙光 200

エピソード 209

身がわり

プロローグ

いつ尋ねても、「十年前」という返事しか返ってこないことに、私は三度目くらいに気がついた。私の育った家は、母が三十の年に仕事のために建てた家で、日本風の家屋である。母はこの家で白無垢を着、打ち掛けをまっとしてお嫁に行った。しかし、帰ってきた。私の記憶は、この家からしかない。

ひどい嵐の日、瓦が飛んだ。ところが修繕しようにも、その時売られていたどの瓦をもつてきても、家の瓦とはサイズがあわない。その時私はほんやりと、この家が十年前に建てられたというのは嘘だなどと思い始めた。知らないうちに瓦はどこからか取り寄せられて、屋根は修繕され、物置きの横には何十枚かの瓦が備えられた。しかしそれ以来、あの年とらぬ家の瓦は飛んだことがない。

その家には小さな庭がついていた。応接間から眺めると隣のお稲荷さんの神木を借景に、実はたいして広くない庭が倍の広さに見えるのが面白かった。我が家にはり出ている枝ぶたいに泥棒が入りはしないかと案じられ、ある時この枝を切ろうという話を持ちあがったが、神木だから、と祖母が反対した。けれどもあの大きな木のおかげで、家の庭が先の方まで続いているように見えたことにも、反対の理由はあったのではないかしら。その木を指さして、私に「借景」の言葉

を教えたのは、当の祖母だったのである。

この庭にはいろいろな花が咲き、実がなった。春、応接間から出れば足もとの「芝桜」に目がいった。「木瓜ぼけの花」執筆中は、次々と木瓜の盆栽が増えていった。「複合汚染」の頃には、小さなすや、曲がつたきゅうり、可愛いトマトに、なぜかまるまらない白菜のようなレタスといった諸々の無農薬野菜で賑にぎわった。私も、小学校一年の時には朝顔を植えて観察日記をつけたし、三年生の時はへちまを育て、つるを応接間の窓にはわけてひと夏の日陰をつくった。

また少し大きくなって、

「いつ聞いても十年前っていうんだから」

と口をとがらせた子供に、笑って答えなかった母親は、心の中で何を想っていたのだろう。いまだびくともしない家を見上げて、私はひとり溜息なげいきをつく。

I

りんごの子

母親は子供を「たあちゃん」と呼んだ。何でも子供がはじめて自分のことを呼んだのが、その「たあちゃん」だったかららしい。たあちゃん、たあちゃんと、この母親は大変に子供を可愛がつて飽き足らず、ことあるごとに子供を自慢のタネにした。

彼女に言わせると、「たあちゃん」は天才なのだそうである。

カタコトを口にするようになった赤ん坊を抱いて、母親は客間の襖ふすまを開ける。その日のお客に、自慢の娘のお披露目ひろめというわけだ。「天才たあちゃん」が、「桃太郎」の話をする事になっていたのである。

母親は腕の中の子供をあやしながら、

「さあ、たあちゃん、お爺さんはどこへしば刈りに行つたの？」
と聞く。すると、かの天才児は、

「ヤマ」
と答える。

「お婆さんはどこに洗濯に行つたんだっけ」

「カワ」

赤穂浪士の合言葉でもあるまいし、全くサギである。

「そこに何が流れてきたの？」

子供は眠そうに「モモ」と答える。この母親のおめでたさかげんにあきれた顔をして、お客が帰ってゆく。母子は玄関先までお見送りに出て、子供は「バイバイ」と手をふらされる。家の前の道を歩き出し、まだいるかなとふり返るお客に、母親は得意気に微笑む。（子供はしらけている）

親バカ。

見たわけでもない情景が目には浮かんてくるのは、一事が万事、この調子だったからである。

母自身は、日本特有の謙遜語的教育を受けてきたらしい。日本人は、いくら優秀な子供でも、自分の子供を「豚児」と言ったり「愚息」だの「愚女」だの言ったりする。教育もその延長で、「お前はバカなんだから、しっかり勉強しろ」などと、叱咤激励調である。これでは伸びるものも伸びない、というのが彼女の持論であった。それで子供をほめそやし、その気にさせて頑張らせる、という教育方針をとったものだろう。

「XXちゃん、頭よくていいな」

などと言おうものなら、この母親は、何を言うかという顔ですつとんできて、

「あんただって頭いいのよっ」

と怒号した。

私の髪を梳きながら、きゅつと額をあげてそれが富士額なのを認めると、

「頭のいい証拠」

と言った。

学校で文法を習ってきて、「かろかつくいいけれ」と形容詞の活用を唱えていたら、トトトと二階からおりてきて、

「文法、面白い？」

と聞く。名詞に始まって、動詞、形容詞、形容動詞くらいまでは面白かったので、

「ウン」

と答えたら、

「そう、文法が面白いなんて、頭がいいからよ」

と力強く言った。後日、助詞、助動詞に入って何もわからなくなったときには、複雑な心境になったものだ。

ところで、私が「頭がいい」ことになっていたのには、彼女^{い、な、り}の根柢があった。

お産は楽なものではなかったらしい。母の綴った記録によれば、五分間隔の陣痛が始まったのが午前二時、山王病院の分娩室入りが九時で、生まれたのは二十二時である。

分娩室の中での十三時間のドラマは幾度となく聞かされた。なんでも、さる天皇家ゆかりの女性が唸り声ひとつあげずに出産されたことを医師に聞かされて、母もそうしたやんごとなき出産を試みたものらしい。けれども十九時頃、分娩体勢に入って十時間を経、自分の辛抱強さに惚れ惚れしたか、悪戯心^{いたづらこころ}が首をもたげた。

(ちよっと言ってみましょう)

この、こっそり枕に内証話をかわきりに、やんごとなき出産譚は、狂おしき出産譚にかわりは

てる。

口にそつと手をあてて、

「イタイ」

そのあとは滅茶苦茶になったと、母が可笑しそうに話してくれた。どう滅茶苦茶になったのかに聞いたことはないが、想像するだけに想像がつくから余計、オカシイ。

しかし、それでも生まれなかった。「おばあちゃまは、ただおろおろと病院の階段をあがったりおりたりしていたのよ」と分娩室にいて外の様子を知るはずもない作家は、こんなふうに出産譚をふくらませる。

それにしても、生まれなかった。

緊張の分娩室に、

「あ」

という声を響かせたのは、看護婦さんである。妊婦は朝から何も食べていない。こう生まれなのは体力がないからだ。賢明な看護婦さんは手の平を打つと、さっそく着いたばかりの青リンゴをむいて母に食べさせた。

それを一口かじったら、とたんに呱呱の声をあげたのが、この私だという。

生命の誕生。感動の一瞬。

「指はちゃんとそろっていますか!？」

「もう一度、数えて下さい!？」

母は、はじめて母親になった。そのまた母である私の祖母は、階段の昇降に疲れ、分娩室の外